

北部秩父帯からの三畳紀新世 Phaeodaria (Radiolaria) の発見

Late Triassic Phaeodarian radiolaria from a phosphatic nodule in melange rocks from the Northern Chichibu Belt, Shikoku, Japan

堀利栄 [1]; 山北聡 [2]

Rie Hori, S.[1]; Satoshi Yamakita[2]

[1] 愛大・理・地球科学; [2] 宮崎大・教育文化

[1] Dept. Earth Sci., Ehime Univ.; [2] Fac. Edu. & Cul., Miyazaki Univ.

Phaeodaria は、Polycystine と並んで Radiolaria (放散虫) の 2 大分類群の一つであるが、有機物混じりの珪質殻のため、ほとんど化石記録として残らないとされている。その最古の化石記録は、サハリンの白亜系 Cenomanian からである (Bragina 2003)。白亜系からの Phaeodaria 化石の産出報告は、他に、ニュージーランド近海の海洋堆積層から (Dumitrica & Hollis 2004) と本邦関東山地から (Takahashi 2004) のものがあるが、本研究では更に古い三畳紀新世の Phaeodaria 化石を発見したので報告する。

Phaeodaria 化石が産出したのは、高知県北部秩父帯に分布する混在岩中のリン酸塩ノジュールからである。同じ地点ないしごく近傍の混在岩中の他のノジュールからは、Monotis 化石も発見されている (波田ほか 1985)。検討したリン酸塩ノジュールからは、比較的保存の良い Polycystine に属する放散虫化石も産出する。まだ予察段階ではあるが、*Fontinella primitiva*, *Ferresium* sp. A of Carter (1993), *Cantalum* spp., *Pantanellium* aff. *skidegatense*, *Kozurastrum decilobum*, *Kozurastrum* sp. B of Carter (1993), *Tetraporobrachia* sp. D of Carter (1993), *Parabipedis acroslylus*, *Laxtorum* spp. などの三畳紀新世おそらく Rhaetian 前期を示す放散虫群集が得られた。今後より詳細な群集組成の検討を行い、正確な年代を決定していく予定である。

得られた Phaeodaria 化石標本は、同試料から得られた Polycystine 放散虫よりも大きく、殻幅 210-250 μ m 前後、殻高 300-400 μ m である。殻のほとんどは再結晶しており、オリジナルな構造を観察する事が困難であるが、殻口の断面に Phaeodaria 独特の中空構造がみられる。その表面には明確な小孔がみられないが、大きな頂角がついた卵型の殻と主歯のついた開口部を持つことから、Challengeriidae (チャレンジェロン科) に属すると考えられる。今回の発見は、Phaeodaria が遅くとも三畳紀新世にはすでに地球上の海洋に生息していたことを示しており、その出現が Polycystine と同程度に古い (カンブリア紀) という推測を裏付けているのかもしれない。

Bragina L. G. (2003) Late Cretaceous Representatives of the Superorder Phaeodaria (Radiolaria). *Psleontological Journal*, 37, 8-10.

Dumitrica P. and Hollis C. J. (2004) Maastrichtian Challengeriidae (phaeodarian radiolaria) from deep sea sediments of SW Pacific. *Revue de micropaleontology*, 47, 127-134.

波田重熙・石井健一・松岡篤・伊沢尚美 (1985) 高知県吾川村・仁淀村地域の秩父累帯北帯. *MRT Newsletter*, 1, 37-42.

Takahashi O. (2004) Phaeodarian Radiolaria from the Upper Cretaceous beds of central Japan. *Revue de micropaleontology*, 47, 119-125.